

「環境建築論」へ向けて

津島 光

Approach to the environmental theory of architecture: A new viewpoint of the Renaissance of the city in the future

Hikari THUSHIMA

The purpose of this paper is the same as that of the No. 01 Applied Sociology Research Review — to consider the importance of environmental theory of architecture and to shape the author's future research project. To clarify this new concept, the traditional definition of the theory of architecture is explained together with the problems associated with it. One of the main issues is the fact that architectural theory has tended to focus on the buildings themselves and not on the whole system encompassing human beings, buildings, and their surroundings. In other words, the new theory, the environmental theory of architecture, is defined as “the theory that aims to systematically understand physical structures in their environment as a whole and the essence of that environment.” Then, experimental projects are introduced in order to demonstrate how students show their insightful attitudes toward the environment around them. The students rediscovered the intrinsic value of their hometowns and the shops in the surrounding areas. In this paper, all considerations of the importance of the environmental theory of architecture are from the sentence: “What is the meaning of the existence of being in the house”? From this approach, I was able to find very important ideas regarding the environmental theory of architecture. One of them is the relationship between everything.

Keywords: what is the word of body, being in the house, being, environment, relations

序

(注—1)

本年、2011年3月11日、観測史上最大級の東日本大地震が発生し、大きな被害を関東・東北地方に与えました。地震による被害と津波による被害がとてつもない現実を我々に突き付けたように感じます。

今、日本全体にその影響が出てきています。私事ですが、思い出しますと1995年1月17日発生の阪神淡路大震災の前日、私は赴任予定の日仏モニュメント現場周辺を家族と巡り、16日晩に大阪の自宅に帰宅しておりました。地震発生の翌早朝の報道によるめざましは今でも、忘れる事ができません。阪神淡路大震災と名付け

られたその震災は400年に一度の地震だと言われました。16年がたって、ようやく落ち着いてこの地震についても私は語れるようになりましたが、まだまだ、生々しい記憶が重なる人々もいます。そんな中で東日本大地震は起こりました。

今、復興へ向けて様々な方向より、東北へ向けて支援の手が向けられています。このような事態の中で私は考えました。設計事務所勤務した30年の経験から、そして、常に頭にあった建築論との分野から、これらの復興の動きの中において思索し貢献できることが可能な事柄を発見できないかと……。もちろんその方向は

建築を志して以来、模索してきた建築設計活動と森田先生より続く建築論の再考の交差点上でと考えました。

環境をめぐる、紀要 NO1 に寄稿しました。

「からだの家の中にあるというのはそういうことだ」という鷲田清一著「身振りの喪失」より環境とは、そして、それを建築論のこれからの視点と合わせ、まだまだ不十分ながら、「環境建築論」ということを定義付け、方向性を仮定し、一考察を及ぼしました。

最終的には環境建築論の目指すべきところが時代が求めている緊急課題である「環境」に総合的な視点を与える可能性があるという事を発見しました。

今回はこの環境建築論の前半の部分をもう一度、深く考えてみたいと思い寄稿しました。環境建築論の概要構成を反省と製作あるいは実践とすると前半の反省について一考察を展開したいと考えた次第です。

もう一度「身体が家の中にあること」という一文に戻り、その文章の意味するところを考えてみます。「からだ」とは何かあるいは「家」とは何か、そして「中」とは何かについて慎重に反省をしたいと思います。その上で「からだの家の中にあるというのはそういうことだ」という一文がどのような状況をさしているのかを考えたいと思います。様々な状況が浮かんできます。まずは文中の「からだ」について、そして「家」について、そして「中」について、反省したいと思います。

I 考察の目的

私の総合社会学部での専門は環境です。そして「都市・まちづくりコース」を担当しています。序でも記載したように始まりは建築からです。今、成熟した日本では、今までの諸学の各分野での発展のみならず、その総合化あるいは統合化への視点が叫ばれています。もしくは各分野の諸学は、成熟期に入った日本社会の複雑化・世界化そして、TPP 交渉への参画表明、CO2 削減の協議等を含め海外諸国との協議・

提携を余儀なくされている日本の世界での役割変化等の地球規模での変動のため、その目標を見失いつつあるとも言えます。

この一考察の目的はもちろん環境建築論をめぐる環境という視点より建築論の可能性を見つける事ですが、一番、重要な目的は、このような時代背景の中、総合社会学部へ進学した学生と建築・都市・まちづくりの視点を発見する考察の始まりとすることです。そして、私のこれからの研究対象の絞り込みの第1ステップとすることです。

II 考察の進め方

考察の進め方は、すべてが

「**からだの家の中にあるというのはそういうことだ。**」

という一文にあるという仮定のもとにこの一文から様々なことを考え、反省し、そしてそれらを通じてある何か方向性ある考えにたどりつくことです。では、この一文よりはじめたいと思います。

先の紀要 NO1 での一考察では、最終的には、常に反省と思索の両輪にて考えを進めるべきとした建築学の一分野である建築論が正に、その早々より環境への視点を持っていたことの慧眼性を発見し、そのことの重要性を論じ、環境建築論を定義しました。森田慶一先生著「建築論」において、下記の記載があります。

「現代建築は、それが抱える複雑な用にかまけて、しばしば、この用の原点、必然性を忘れがちであり、意識せずに済ませている。しかし、それは建築の進歩の名の下に無視されてよいものではない。建築による複雑化した人工環境の造成が人間の生存とどのようにかわり合うか、これが現在問われるべき建築論のひとつの課題である。」

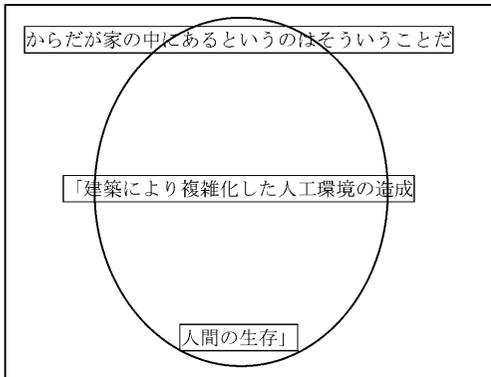
(* - 1)

この一文より、「建築論の一つの課題」と明記された「建築の複雑化した人工環境の造成が人間の生存とどのようにかわりあうか」、このあたりのことから論じてみたいと考えます。

下図に表現した「からだの家の中にあるとい

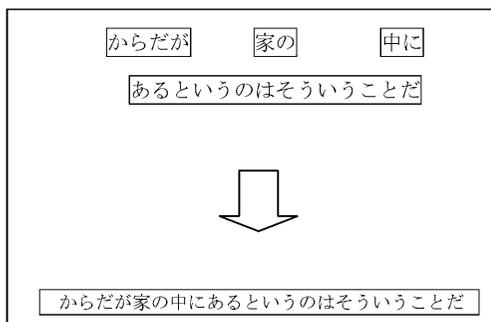
うこと」と「建築により複雑化した人工環境の造成」、そして「人間の生存」とのかかわりから、大変に楽しい考察が開始できるように私は感じます。

下図の円はそれを表現しています。



図一 考えの全体像イメージ

まず、それぞれの文節より始めましょう。それは一文を、文節に沿い分解し、「からだ」と「家の中に」と「あるというのは」そして、「そういうことだ」のそれぞれを反省し、その後、「からだ」が「家の中」にあるというのはそういうことだ」との全文を考えたいとするものです。図示すれば下記ようになります。



図二 考え方の構図

ところで、建築論と同じく、あるべき将来の建築設計を模索した京都大学・門内教授他が環境という視点より日本建築学会にて研究をつまめた「人間一環境系のデザイン」という報告書があります。研究の目的は明快で下記と謳われています。

「人びとの日常生活とそれが展開している場所の形成・維持・更新に必要な知識・方

法・実践にかかわる人間一環境系デザインの方法論を研究することが本書の目的である。」（* - 2）

そして、この報告書は最終的に建築計画学の中での位置づけをはっきりと認識し、人間一環境系デザインの主張として、下記のように述べています。

- (1) 空間が生活を援助すること
- (2) 空間が生活要求を喚起すること
- (3) 環境が働きかけ（アフォーダンス）をおもくみること
- (4) 人間一環境系の多様な関係の時間的移行を許容する空間を実現すること

（* - 3）

この主張は反省と製作を両輪とする建築論の将来へのパースペクティブを見つけないという私の最終目標に大変に参考になる方法論として今後、参考になると考えています。また、環境建築論の目標である反省と製作、そして実践というアプローチに大変に近い目的と考えられます。では、考察を始めましょう。

Ⅲ 存在へ

Ⅲ-1 「からだ」

「からだ」はからだを主語にその位置を表現しています。どのような場所からだがあるかを示す序文です。からだ、身体と言われると精神あるいは心という言葉が浮かびます。からだは精神は一体であるとか、別であるとかいわれます。さて、ここで言うからだはどのようなからだを考えるべきでしょうか。からだからだのみをさし、精神は別なのでしょうか。しかし、すぐにわかることではありますが、からだのみであるという状況を我々は感じることはできません。こころのみであるという状況はひよっとしたら、寝ている時の夢を見ている状況等であるのかもしれませんが、からだだけの認識はとても無理なようです。

この事はこころのからだへの優位性を示すものか、もしくは絶対性と呼ぶべきか。また、こころは永遠に続くとも言われます。確かにからだは土の中か、あるいは日本では火葬が主です

ので、灰となります。

ただ一方で、朦朧としてからだけが浮遊しているという状況もよく語られますのも確かです。この状況は無意識の状況です。どのように解釈すべきでしょうか。文中の主役はもちろん生存者です。グループホームの訪問者です。しっかりと意識をもって、このグループホームに立ち寄った方々です。

「からだが」と言われたときに、文中でのその後の展開から言えば、からだのみでもなく、こころのみでもなく、からだところをとりあえず別と考へても、この「からだが」はいっしょに、もしくは分ける事はできない一体と考へるべきではないでしょうか。

人間はとても平常な状況の中で生きてるといわれます。そのことはホメオステイシスと呼ばれています。恒常性です。昆虫等の変温動物と比較して恒温動物とされる由縁です。体温・あせ……等の数値が動物の中で際立って小さい範囲の中にあります。

文中の主役は心静かな平常な状況であることに間違いありません。興味深く、大して改修もせずグループホームとして使用している建物を、機会あって訪問したのです。

このような状況を考へると「からだが」には、心あるいは精神が極めて常識的には意識下にて、からだと心、あるいは精神が共にあり、ごく普通の平穏な一体的状況であると思ひます。

では、そのような「からだが」次は「家の中に」と続きます。これはどのような事でしょうか。

III-2 「家の中に」

「家の中に」をさらに「家」という意味とその「中」という風に分けて考へてみましょう。まずは家です。

我々が家という時、その大変に物理的な構造物をさして家というのでしょうか。家ということばの語源は下記のように言われています。

- ・居住用の建物。うち
- ・同じ家に住む人々の集合体

・代々伝えてきた家、またはそうみられるもの

・家の状態

・在家、俗世界

・小さな道具類を入れる箱 (*-4)

様々な家があります。語源の発生的な歴史もあるでしょうが、我々が家とかうちとか仮定と使え分けている日常会話でもその文脈で結構な差があることがわかります。家の指し示すものは様々なのです。

建築論の中での建築の定義も様々です。建築、アーキテクチャーは語源的に前記の建築論で、下記で定義されています。

「この建築という語およびその抱懐する包括的な観念がわが国において成立したのは、比較的新しいことである。おそらく今から百年のほども以前、幕末から明治にかけて、西洋の文物が急激に移入された時、ラテン語の *architectura* に由来するヨーロッパ語を翻訳する必要に迫られて「建築」の語が案出されたのであろう。西洋では、この *architectura* の語でいい表わせる包括的な観念が、既に古典古代に成立していたのである。もっとも、この古代ローマ人が思念していた *architectura* なる概念は、単に「建物を建てる術」よりもっと広い内容を含んでいて、土木技術・機械技術・造幣技術などのいわゆる大技術、すなわち高度な知識を必要とする技術一般、を含んでいたのであるが、その第一に位するのは、やはり建物を造る技術、建築術、だったのである。そして、それがルネサンス以降おおよそ建物を建てる術一本に絞られていって、今日に及んでいるのである。こうして、現在、われわれは、ヨーロッパの歴史の中で成立した *architecture* なるこの包括的な観念を受け入れながら、「建築」を考へているのである。」 (*-5)

しかしながら、大した改修もされずにグループホームとして使用されている家は用途が変更されているということより、ただ単に雨露をしのごく木造の家というのではないのではないかと

考えるのが自然です。その場にいる人々、音・熱等の環境の諸元がある方向性をもった空間、雰囲気を持つ空間を予想させます。そのことが「家」であり、「家の中に」の中ということが示しているのではないのでしょうか。外ではなく中に……この時の中とは一体的とか、まったく重なってとか、大変に良好な「身体」と「家」の関係を予想させます。身体と心とごく普通の平穏で一体的な状況とした「身体が」は単に物理的な家ではなく、ある方向性をもつ「家の中に」あるのです。

次は「あるということ」とはどのような事でしょう。

Ⅲ-3 「あるということ」

「あるということ」は存在するという事と云っていいでしょう。存在することということは、存在論として古くからの哲学上の命題です。ドイツ語の *ontologie* ラテン語の *ontologia* でギリシャ語の「存在するもの」の「オン」と「理論」を意味する「ロゴス」から存在論は語られます。あることだけではなくそのあり方も含むと考えられたのですが、ただし、本論は存在論についてのみ考察するのは主旨ではありません。「あるということ」をこの一文の文脈より考えようとするものです。

「…がある」と「である」は違うことのようなのです。「…がある」は何か極めて意識的な現実的な状況、一瞬の奇跡的な今を表わしているように私は感じます。「…がある」は第3者である観察者が自分とは違う何かの状況を指し示す事を指しています。それに対面しているのは、私です。「あるということ」は主語である何かがある時、その場所で奇跡的に存在する状況を示していると考えてよさそうです。

Ⅲ-4 「そういうことだ」

「そういうことだ」はあらためて文中のはじめのあたりを探る必要があります。文中には下記と記載されている。

「和室の居間でたったままではいることは「不自然」である。「不自然」であるのは、い

うまでもなく、人体にとってではない。居間という空間においてである。居間という空間が求める挙措の「風」に、立ったままではいることは合わない。高みから他のひとたちを見下ろすことは「風」に反する。だから、いたたまれなくなって、腰を下ろす。これはからだで憶えているふるまいである。からだだけがひとりでそんなふう動いてしまう。」（* - 6）

このグループホームを訪問した女性は、和室の今でたったままではいれず、おもわず腰をおろしていたとあります。このおもわず腰をおろすという事をさして「からだの家の中にある。」と言っています。そして、あるいは、居間という空間が求める挙措の「風」と指摘しています。また、からだで憶えているふるまいであると述べていることも重要です。からだだけがひとりでそんなように動いてしまうのです。「あるということ」の分析であった意識的な方向性ではなく、ごく自然に、あるいは無意識にこのような行動がとられるのです。筆者はそれを空間であるといい、空間が挙措の「風」を持っていると指摘しています。その上、からだが自然に動いてしまうと指摘し、あたかも魔法のような仕掛けがあるように記述して、それらすべての事が、現象が、何も改修もしていないグループホームにあることの重大性を訴えているのです。これはどういうことでしょうか。考察を進めましょう。

Ⅲ-5 「からだの家の中にあるということとは そういうことだ」

「からだ」と「家の中に」と「あるということ」は、そして「そういうことだ」のそれぞれについて一考察を及ぼしました。もちろん文中の事ですので、それぞれが意味するところは文中での限られた意味でしょうが、できるだけ広く考えるようにしたいと思います。

では、今、この一文「からだの家の中にある」ということはそういうことだ」を考えてみる事は、いったいどういうことなのでしょう。

たとえば、「からだの家の中にないとはそう

いうことだ」と比較してみましょう。「ある」と「ない」の差です。また、「からだの家の外にある」というのはそういうことだ」はどうでしょうか。「ない」と「外」との差です。当り前ではありますが、気がつくのは「家の中にない」あるいは「家の外にある」という言葉のつながりがとても不自然に聞こえる事です。このことは何を指しているのでしょうか。今まで、考察を進めたきたそれぞれの言葉ですが、少しでも変形すると違った感じを与えるのはどうしてなのでしょう。極めて一般的とも言えますし、何かおかしいと多くの人は指摘するでしょう。しかし、家の指し示すことは広範です。はたして必ずおかしいと言えきれるのでしょうか。

私の考察の主眼は環境について考える事です。そして、その環境ということを経験論の中で考えてみて、発展的な何か将来の実践的な方向を見つけたいとの主旨です。一文を変えた時の感じ方の違いは、それぞれの言葉の関係が変化することではないでしょうか。

そしてその関係という事が、とても大切なことを指し示しているのではないのでしょうか。現実には存在する家の他、人、犬、猫などそれぞれは主体的な存在と言えるのでしょうか、その一瞬での存在です。ある意味で奇跡的に、その一瞬、物理的・生物的…な交差の真ん中にあるのではないのでしょうか。それが存在です。

簡単ではありませんが、一文の考察は存在の意味と存在の関係ということ言えば、その関係にこそ優位があることを示していると言えます。その場にいる人と人、人と人々あるいは人とそのほかのものとの関係の方が重要なことなのではないでしょうか。なんとも当たり前のことかもしれませんが、ここで私が一考察を及ぼした内容は「関係」こそ、主たる命題であることを指しているのです。

もとより人間から始まるこの一考察ですが、環境と言う広い概念にその考えを及ぼす時、主体であるそれぞれの物、事よりもその関係こそが重要であり、また、興味深い命題となると考えられます。それぞれの事のみを考察には、限

定的で固定的な考えが重要な要素となり、今回の考察で目指している将来的・発展的な建築論のパースペクティブの対象とは注意深く、区別する必要があるように、今までの一考察が示していると考えられます。重要なのは「関係」なのです。

それは、よく言われる見る人、見られる人という区別をして、現実を問う時そのまなざしのみが存在であり「見る人、見られる人はあくまでも仮想である。」とせざるを言えないという現象学の命題に繋がるものかもしれません。

IV 「関係」から「環境」へ

本論の課題は下記です

「環境建築へ」向けて

かなり、今までの考察から離れていると感じるかもしれませんが、私の一考察の最終目標が極めて実践的な考察の手法の発見にあるためです。これはまた、いまだに建築論の初期の段階で指摘されているそのひとつの役割である先にあげた下記に明確な回答を出していない状況と私には思えるからです。

「現代建築は、それが抱える複雑な用にかまけて、しばしば、この用の原点、必然性を忘れがちであり、意識せずに済ませている。しかし、それは建築の進歩の名の下に無視されてよいものではない。建築による複雑化した人工環境の造成が人間の生存とどのようにかわり合うか、これが現在問われるべき建築論のひとつの課題である。」

(* - 1)

大変に大きな課題ですが、各文節より開始した反省は全体の文節の中での位置が大変に大事なことがわかりました。「関係」、これはわれわれの在り方がひとつひとつの存在から、関係性にその重大な位置を移しているか、もしくは、当初よりその関係こそが重要であったのだということを示していることもわかりました。

V 環境建築論へ

環境建築論は私の最終の目標です。紀要NO1で環境建築論を最終的に下記にて定義し

ました。

「環境というものをできるだけ全一的に捉えて、その本質を明らかにしようと理論的な体系的考察」

森田先生の建築論を発展的に環境建築論として建築論の将来へのパースペクティブを発見できる展開ある分野と考えた次第です。ちなみに、参考ではありますが、現在の近畿大学総合社会学部での環境建築論の現在のシラバスでは下記とされています。

「環境共生」について、その満たすべき基本的要件として「低環境負荷」「親自然性」「健康・快適性」の3つがある。本講義では、「低環境負荷」については、建築・地域・都市における省資源・省エネルギーの工夫や地域環境に調和した建築のあり方について、「親自然性」については緑化手法や自然環境保全手法について、「健康・快適性」については室内環境の安全やアメニティーについての知識を習得する。」（*—7）

VI 結語

今回の一考察である「からだが」、「家の」、「中に」、「あるということ」の反省は環境建築論についての始まりの考察です。それらが「からだ家が家の中にあるということはそういうことだ」と連携した時に、我々が考える情景が「関係」という大変に重要な視点を与えてくれました。

「身振りの喪失」の中ではそれは行動として「拳措の風」として吹き、訪問した主人公にごく自然に座るように促しました。

「環境建築論へ」としたこの一考察ですが、今後、この考えを進め、後半の考察を実施して研究を重ねたいと考えます。

そして、「環境」とは何かについて諸先輩の研究を概観した上で実証的な検証も経て、回答を見つけないと考えると、「関係」へというのが、ひとまず、今の回答としたいと思います。

（注—1）本稿は研究ノートとして、今回の紀要に寄稿したものである。身体論、家の概念等を考察した既往論文・著書との関係は今後、明確としたい。もちろん、そのことが自らの考えのはじまりに寄与することを確認して参考としていきたい。

脚注

- （*—1） 森田慶一著
「建築論」P3
東海大学出版
- （*—2） 日本建築学会編
「人間—関係の系のデザイン」P4
彰国社
- （*—3） 日本建築学会編
「人間—関係の系のデザイン」P19
彰国社
- （*—4） 新村 出編
「広辞苑」第5版
岩波出版
- （*—5） 森田慶一著
「建築論」P4
東海大学出版
- （*—6） 2011年度 センター試験
国語 第1問より
：原典、鷺田清一著
「身ぶりの消失」
X-Knowledge Home
特別編集 No.5
『昭和住宅メモリー』
そして家は生きつづける。』
（エクスナレッジ社発行、
2005年8月 p.122—123）
- （*—7） 平成22年度 近畿大学総合社会学部 講義要領 P155